

特異点を認識すれば 発展の糸口を発見できる

東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男

特異点思想の出現

およそ二〇年前、二〇〇〇年問題が社会の話題になったことがある。コンピュータの記憶素子が高価な時代の名残で、西暦の下二桁だけ年数を記録していたため、一九〇〇年と二〇〇〇年の区別が出来なくなるという問題であったが、大騒ぎほどの混乱はなく解決された。

最近では二〇二〇年問題も心配されている。出版点数が急速に増加して、

国立国会図書館の書架が不足して収納できなくなるのではないかという心配である。

これらの問題もある程度は深刻であるが、桁違いに深刻な二〇四五年問題が予告されている。アメリカの天才学者レイ・カーツワイルが二〇〇五年に提起した問題で、現在の趨勢でコンピュータが発展していくと、二〇三〇年頃に人間の脳力以上のコンピュータが出現し、二〇四五年には人類全体の脳力の合計を上回



ることになり、最悪の場合は人間とコンピュータが対立して巨大な社会問題が発生するという警告である。

このような時点をカーツワイルは特異点（シンギュラリティ）と名付

けているが、この一点を境界にして、それ以前の原理や原則が、それ以後にはまったく通用しなくなるという意味である。現状では人間が作成したプログラムによってコンピュータは管理されているという前提で社会は維持されているが、特異点を通過すると、コンピュータが独自の判断で作動しはじめるといふ空想科学小説の世界の出現である。

特異点突破で飛躍した日本

科学技術の話題で、しかも三〇年先の問題だと楽観されるかもしれないが、これまでも一般社会には特異点が何度も登場している。その代表は産業革命である。蒸気機関や紡織機械の発明により、経済の中心が農業から工業に移行するとともに、社会を支配する基本財が土地から資本になり、その結果、支配階級が地主層から資本家に転換するなどのドミノ現象により、それ以前の社会の仕組みは役に立たない時代が出現したのである。

そのような時期に重要なことは、

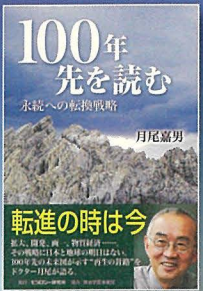
既存の常識や制度を棄却することである。明治維新は近代日本の特異点であるが、そこから一五〇年弱で人口は三・七倍に増加し、国内総生産も世界の二・三%から八・七%を占有する大国に発展してきた。それは殖産興業により農業から工業へ移行し、四民平等により階層社会を平等社会に転換し、文明開化により西欧文明を導入し、それ以前の社会の構造を廃棄して新生した成果である。

見極めれば絶好の機会

日本は一九九〇年代初期のバブル経済崩壊以来、社会全体が停滞気味である。一九八九年には株式時価総額の世界上位二〇社のうち一五社が日本企業であったが、二〇〇七年には一社、一二年にはゼロである。一気に上位に浮上してきたのはアップルやマイクロソフトなど新興企業である。この激変は日本が明治維新と太平洋戦争敗戦以来の第三の特異点に直面している証拠であるが、それに気づかず、従来の構造が継続している。

増大社会から減少社会、集権主義から分権主義、物質経済から情報経済、官公主導から民間主導、開発中心から環境中心など、世界の潮流は反転しているが、日本では経済は重厚長大の巨大企業に依存し、政策は中央政府の官僚が差配するというように、明治維新以来の社会構造が継続している。過度の成功体験崇拜が失敗の原因とされるように、特異点通過後の時代には過去の栄光は無用の長物にすぎないが、日本は脱却できていない。

しかし、ホンダやソニーやパナソニックなど戦前の財閥体制に関係なく躍進した企業は、終戦による特異点の出現にいち早く気づいた企業であるように、社会が十分には気づいていない現在の特異点は新規の事業の出現に絶好の機会である。これまで既存の制度の「カベ」によって新規事業が開始できない、一般社会が認知してくれないなど成功体験のない地方の企業や中小の企業が、特異点の本質を見極めれば眼前には大海が出現する。



絶賛発売中!!
ご注文は添付のハガキで